

理学部の将来

宮 沢 弘 成 (物理学教室)

永年住んできた理学部を去るにあたって、これからどうなるだろうかと考えていることを少しのべてみたい。

理学部は大学院大学になるのがよいと考えていたが、全学でその方向に動きつつあることは大変

喜ばしい。この問題は理学部が先頭切ってやらなければならぬ。また理学部一号館を建て直して立派なものにしたい、改装を断ってきたのだが、これもうまくいくかもしれぬ。もう一つ物理が独立して新学部をつくることも考えたが、これはま

だ目鼻がつかない。

ももとは、大学院大学になり新しい建物をつくるには、本郷でなく新天地がよいと考えた。候補地を探すと、北多摩によいところがあった。東京天文台、その下に調布飛行場（都営？）、その隣に米軍家族住居あとの関東村と、三鷹、調布、府中、小金井市にまたがる地域で全部で300ヘクタールである。これは東大全部が移るのにちょうど良い広さである。台地と平地と間に川が流れて、雰囲気はよい。このあたりは住居専用地区で大学はたてられないことになっているが、大学院ならよかろう。物理の先生の自宅住所をしらべてみると、その重心が杉並区永福町あたりであった。そこからは本郷より多摩のほうが近い。移転反対があるはずがない。こんな案をつくって喜んだのだが、丁度立川移転計画が始まったので、干渉しないようにと教室外公表を控えてしまった。この関東村は何度も利用計画がだされながら、未だに空き地である。現在は某大学の移転がいられているが、果たしてどうなるか。東大もここへの移転を考えてみてはどんなものだろうか。

大学院という言葉は、大学のつけたりのように適当でない。最高の学問研究所を意味するうまい言葉がないかと古典をしらべると、太学という単語があったが、これは大学と同じだろうか。とにかく大学院よりはもっとよくない。教授に替わるものとして、教え諭し、教え授けるのに対し、教え研究するのだから教研あるいは教究だろうが、どうも響きがよくない。前途多難である。

ところでこれらのことは理学部をなんとか変えたいという発想からであるが、今理学部を離れるにあたって客観的な立場からみると、多少異なった考え方もできる。日本の学界にとって必要なのは大学院を重点とする大学よりは、大学を付属にもつ大学院ではないか（やはり大学院に替わる言葉が欲しい！）。そしてそれは既存の大学をつくり替えるより、全く新しくつくるのがよくはないか。数十年前七年制高校制度が設けられた。その際一高などの既存の三年制高校はそのままにし、

新しく東高などをつくったのだが、これは成功したといえる。

機械などで、老朽部品を取り替えながら使うのは限度がある。ある段階で新品に替えた方が能率がよい。生物がこれをやっている。いつまでも生きようとせず、分身といえる子供をつくってそれに生命を託し、永遠に伝えようとするのである。理学部もその伝統を受け継ぐ分身である理学院を別に新しくつくったらどんなものだろうか（伝統とは何か？）。大学全体が変態するのは慣性が大きすぎてなかなかむつかしい。

生物はさらに高度のことをやる。子供が成長したら親は邪魔だから死んでしまえと、そのような情報が遺伝子に組み込まれているそうである。それが種族の生命を永く伝えるため生物がつくりだした手段なのだろう。理学部にあてはめると、理学院をつくったあと適当なときに解散してしまうことになる。果たしてそれが最善の手段かどうか生物の先生に伺わなければならないが、どうせ死ぬのだから何もしないということにならないのもち論である。寿命までは、必要ならば治療をして、健康に生きなければならない。

制度の改革期を迎えてなかなか大変である。あとの人達しっかりやってくれと言いたいところだが、事態は全然深刻ではないのである。あとが心配で、若いものを頼りなくみるのは老人の通弊である。毎年若い新人が入り、年寄りを定年で追い出すのはやはり生物の原理にあっていることなのだが、若い人は先輩と同様に、それ以上に立派にやっていくのである。理学部は名称は変わっても、その伝統（！）はあとあとまで受け継がれていくことであろう。

永年付き合っ下さった方がたに紙面をかりてお礼申上げる。